

I. 組織の基本方針、財政健全化と存在意義の再定義

1-1. 財政健全化と補助金のジレンマ

- 現状の課題（事業スリム化の壁）：
 - このままでは財政がマイナスになる（赤字傾向）深刻な現状を直視し、事業費を抑えて運営をスリム化・効率化することが急務である。
 - 市の補助金（上限90万円）は「事業実績」に連動して交付される仕組みであり、過度に事業を削減すると補助金自体も減額され、かえって財政を圧迫するリスク（ジレンマ）が存在する。
- 今後のアプローチ：
 - 各事業の収支報告をさらに明確化し、費用対効果を見極めた上で「どこを維持し、どこを削るか（選択と集中）」を厳格に判断する。
 - 受益者負担の検討（新規アイデア）：これまで無料、または極めて低額だった部分に対し、「参加者個人からも少しずつ参加費・協力金（自己負担）をいただく仕組み」への移行を検討する。

1-2. 同窓会の魅力と存在意義の再定義

- 三大行事（体育祭・芸能大会・作品展）の原点回帰：
 - 「三大行事」という形式的な形にとらわれず、各行事の「意味と意義」を本質的に問い直す。
- 会員の期待に沿った見直し：
 - 「同窓会の魅力とは何か、会員の期待はどこにあるのか」に常に耳を傾ける。
 - 時代や会員の年齢層の変化に合わせ、既存イベントの内容を柔軟にアップデートする勇気を持つ。

II. 財務の「見える化」と予算管理・制度改革

まずは「お金の流れの透明化」と「不適切・不透明な支出の排除」を最優先課題として取り組みます。

2-1. 支出の「見える化」と実態把握

- 助成金一覧表の作成・開示：
 - 各部門（総務、体育祭、芸能大会、作品展、各部活・同好会等）、同窓会費がいくら渡り、何に使われているかを一覧表にして初めて提示する。
 - 今後は「A 助成金の一覧表」にすべての情報を載せ、財源の厳しい状況を全員で共有・把握することで、各自が自律的に行動できる土台を作る。
- 参加人数に応じた予算の再配分：
 - 予算の配分を各活動や同好会の実際の参加人数に連動させ、実態に即した適正な予算枠（支出）を設定する。

2-2. コンプライアンスの遵守（換金性景品の廃止）と支出削減

- 金券類の全面廃止：
 - 競技大会やビンゴ大会等における「商品券」や「図書カード」などの配布を全面廃止する。税務上のリスク（確定申告義務）や、市の補助金が打ち切られる法的リスクを確実に回避する。
 - 代替案への切り替え：日用雑貨（タオル、ゴミ袋等）の実用的な賞品、あるいは「立派な賞状」といった名誉を重んじる表彰形式へと統合・統一する。
- 事務費・諸手当の削減：
 - 現在支給されている「1,000円/年」の理事の旅費交通費（諸手当）は、事務処理の手間や財政への影響を考慮してどうすべきかを検討する。

2-3. 助成金制度の改革と「受益者負担」への移行

- 「受益者負担（独立採算）」の徹底：
 - 原則として参加費による運営：「すべての大会は、参加者の費用で行う（同窓会からの補助・協力は原則しない）」という方針への移行を目指す。
 - 「お金」から「価値」への繋がり転換：資金支援に依存するのではなく、活動そのものが持つ「楽しさ」「やってて良かった」と思える本質的な価値（やりがい・繋がり）を重視する。
- 助成金基準の公平な見直し：
 - 資金が潤沢だった過去のルールを一律で見直し、全体のバランスを考慮した助成基準へ再整理（刷新と統一）する。
 - 活動特性に応じた配分：「PC同好会」のように高額な講師謝礼や会場費が必要な団体と、「麻雀」「ウォーキング」のように低コストで運営可能な団体の格差をどう埋めるかは課題である。
- 新たな財源の確保（賛助会員制度）：
 - 従来の会費依存から脱却するため、新たに「賛助会員制度」を創設し、外部や賛同者からの支援・寄付を募る仕組みづくりを検討する。

III. 三大行事（体育祭・芸能大会・作品展）の具体改革案

安全性、費用対効果、そして参加者の「主体性」の観点から大胆な再定義と見直しを行います。

3-1. 体育祭：安全性重視と縮小・廃止・個別化の検討

- 安全管理の限界と会員の段階的な高齢化：
 - 既存の会員がだんだんと高齢化している現状を直視し、骨折などの重大なケガのリスクが極めて高くなっていることから、体力的な負担を考慮した持続可能なイベント構成が必須である。
- 実施形式の変更と軽スポーツへのシフト：
 - 従来の「体育祭」という一堂に会する形式にこだわらず、競技ごとの個別大会（安全性に配慮したもの）に特化・移行させる。
 - 安全性の観点から、走り回るハードな競技ではなく、誰もが怪我なく楽しんで参加できる「ボッチャ」「モルック」といった軽スポーツへの転換を引き続き進める。
- 学科再編による影響への対策：
 - 市民大学校から「健康スポーツ科」などの競技直結型の学科が無くなったことで、体育祭運営に対する学科からのバックアップや、事前の盛り上がりが薄れている課題を解決する必要がある。
- 参加の心理的ハードルを下げる工夫（チーム単位での参加促進）：
 - 個人でのエントリーは「参加が難しい」「ハードルが高い」と感じてしまう会員が多い。
 - クラスやサークル、あるいは「班・グループ（小規模なコミュニティ）」単位でのエントリーを積極的に促し、「仲間と一緒に参加できる安心感」を作り出す。
 - 同窓会の将来を担う「現役生からの積極的な参加」を求め、彼らが気軽に参加できるプログラムや枠組みを用意する。
- 会場とコストの具体案：
 - 外部施設（スポーツパークなど）の活用：平日の利用であれば利用料が安価に抑えられるため、こうした施設を上手に活用する。
 - 予算配分の見直し：来賓への交通費などの支出は連合会が一部カバーするなどの工夫を施し、クラス・班単位での参加の障壁を下げる。
 - ビンゴゲーム等の廃止と景品の自己負担化：体育祭内の「ビンゴゲーム」等は廃止し、景品を出す場合は「景品代は参加者間で分担する」など、自己負担を基本とする。

3-2. 芸能大会：会場コスト削減とマインド改革

- **会場費の負担軽減と会場選定の課題：**
 - 最大の支出源である会場費（きららホール等：約7万6千円）の削減が最大のテーマ。
 - 会場を「より安い場所」へ変更することを基本方針とし、会場費の安い公民館や地域の集会室等に代替できないかを具体的に模索する。
 - 将来的には「中央公民館」への移行でコストをさらに抑えられる可能性がある。
- **出演者・観客の確保と「生きがい」の創出：**
 - **能動的な参加へのシフト：**現状は担当者からの「声掛け・依頼」に頼って出演者を確保しており、自発的な応募が少ないことが課題。
 - **「おさらい会」としてのやりがい：**個々の会員が日頃から一生懸命やってきたことを発表する「おさらい会」としての役割（リブランディング）が、参加者の「やる気」や「やりがい」を引き出す源泉とする。
 - **見てもらえる喜び：**単に内輪で楽しむだけでなく、「皆にパフォーマンスを見てもらえる喜び」がシニア会員の生きがいに直結していることを重視する。
- **プログラムの質と満足度の追求：**
 - 参加している人（演者）が楽しいだけでなく、観に来ている観客（来場者）も心から楽しめているか、双方が満足できるイベントになっているかを本質的に問い直す。
 - アンケートにおける「過去の映像（録画）を流すだけの演出は退屈」という厳しい意見を真摯に受け止め、生身のリアルな発表の熱量を大切にすること。
- **今後の方向性と新規参入：**
 - 身内だけのこじんまりとした「発表会」としてコストを抑えて実施するか、あるいは入場料を徴収するほどの「質の高い興行」を目指して集客力を高めるか、明確な位置づけを決定する。
 - **新規参入の仕組みづくり：**従来のメンバーだけで固定化させず、どのようにして新しい人（新会員や現役生）を芸能大会の場に巻き込んでいくかの戦略を検討すること。
 - 参加人数の少ない種目や同好会は、必要に応じて「統廃合・終息」も視野に再検討すること。

3-3. 作品展：効率化とさらなるオープン化

- **規模の現状と会場費削減（日程・期間の見直し）：**
 - 市民ギャラリー等の会場費に約26万円を費やしており、非常に大きな負担となっている。
 - これまでの開催期間を短縮（「期を短く」する）するだけでなく、開催日程そのものを抜本的に見直すことで、会場借用費を物理的に削減すること。
- **「攻め」の活性化アイデアと他行事との連動：**
 - **新しい人の取り込みによる収入源確保：**会員以外の一般市民や、これまでにない新しい層へアプローチし作品を取り込むことで、出品料等の新たな収入源として確立させる。
 - **一般出品料の導入：**「一般市民は誰でも、出品料1,200円を支払うことで自身の名前で出品できる」という具体的な出品ルール制度の導入を推進し、門戸を広げることで、収支改善と地域社会との結びつきを両立させる。
- **市民大・学校現役生との連携：**
 - 市民大・学校の現役生（陶芸や絵手紙などの受講生）とコラボレーションし、彼らの作品展示の場とすることで、同窓会と現役生との接点を強化すること。
- **行事間の好循環：**
 - 「作品展への出品」が刺激となり、翌年には「芸能大会で発表したい」という意欲が湧くケースが見られる。行事同士を連動させ、会員の意欲を高める循環を作る。

IV. 会議運営・組織の活性化とエンゲージメント強化

4-1. 会議運営と物理的環境の改善

- 会場の適正化（広い講堂から集会室へ）：
 - 現在の課題として「参加人数の減少（約35～36名）」と「広い講堂での声の届きにくさ（マイクが反響して聞き取りにくい、距離感の遠さ）」が挙げられている。
 - 広い講堂での理事会を廃止し、より対話しやすく仲間意識が育ちやすい、適正な広さの「第1・第2会議室」を連結して使用する。

4-2. 役員・理事のあり方と負担軽減

- 義務感から「やりがい」へのシフト：
 - 役員や理事を「強要（押し付け）」するのではなく、「そこに入ればやりがいがあり、学びや喜び、人と人との強い繋がり（絆）が得られる」という温かい雰囲気を作る。
 - 「自分たち自身が楽しく生きる（活動する）」ことを活動の原点に据える。
- 「全員に役割を」分担する運営（当事者意識の醸成）：
 - 理事1人ずつに具体的な役割や仕事（プロジェクト）を少しずつ割り振る。
 - 「1人にしない（人を他人にしない）」をスローガンに、1人の負担を減らし全員で運営する形を目指すことで、活動そのものを「楽しい」と感じられる雰囲気を作り、当事者意識を引き出す。
- 双方向コミュニケーションの導入：
 - 「2分スピーチ」などの仕組みを取り入れ、各理事の声をすくい上げ、相互理解と共感を深める。
- 任期制度の柔軟化：
 - 「2年連続で固定されるため、心理的に動きづらい」といった役員任期に関する懸念の声があり、より参加しやすい柔軟なサポート体制の導入を模索する。

4-3. 広報・連絡体制の改善と効率化

- 広報紙（会報）の配布方法見直し（配布の徹底とコスト削減）：
 - 「会報の配布が行き届いていない」という指摘と、郵送に伴うコストの双方を同時に解消する。
 - 郵送から「公共施設設置」へのシフト：図書館、公民館などの市民が日常的に訪れる公共施設に設置・配布を強化し、露出を増やして「自発的に手に取ってもらう」流れを作る。
 - 情報伝達や広報プロセスの見直しに加え、デジタル化（LINE活用等）も含めた対策を推進する。

4-4. 現役学生（市民大学校）へのエンゲージメント強化

- 大学カリキュラムとの「出口」としての連動：
 - 同窓会の持続可能性を確保するために、現役の学生をいかに早い段階で巻き込めるかが鍵となる。
 - 授業内の成果物を発表・展示する「出口」として同窓会行事を位置づける（関係性強化）。
- アドバイザー（RA）の強みを活かした草の根アプローチ：
 - 同窓会の魅力やメリットが十分に伝わっていない現状を解消するため、「アドバイザーが1年間かけて丁寧に説明したことで、クラス50名全員が入会した」という成功体験をモデル化する。
 - ルームアドバイザー（RA）が年間を通じて丁寧に現役生と関わり、信頼関係を作った上で入会を促す個別アプローチを計画的に実施する。
- 新規参加を促す仕掛けづくり：
 - 市の公式広報紙への活動掲載を依頼し、認知度を向上させる。
 - イベント参加者への「商品進呈（実用的賞品など）」など、気軽に参加できるインセンティブ（フック）を用意する。

V. 時代に合わせた事業転換と既存活動の整理

「毎年同じことを繰り返す」前例踏襲から脱却し、時代のニーズに合わせたコンテンツの導入と、参加者が減少している既存事業の整理を行う。

5-1. 既存活動の整理と見直し

- **不人気大会・活動の終息（スリム化）：**
 - 「大会参加者の少ないものは再検討し、終息（スリム化）させる」というルールを適用し、限られたリソースを選択と集中によって最適化する。
- **高齢化への対策と活動移行：**
 - 高齢化が進むパークゴルフやグラウンドゴルフ等の競技について、大会維持の限界を見極め、今後の開催規模や形態（他団体への移行など）を検討する。
 - （例：スポーツパーク等の設備状況を鑑み、市同好会連合会等への事業移行を視野に入れる）

5-2. 新たなコンテンツの積極導入

- **「eスポーツ」の導入：**
 - 多世代交流や若年層の取り込み、シニアの認知症予防などを目的として、他校でも実績のある「eスポーツ」をイベントに盛り込む。
- **「ユニバーサルスポーツ」の導入：**
 - 年齢、性別、運動能力に関わらず、誰もが一緒に楽しめる最新のユニバーサルスポーツ（ボッチャやモルックなど）を積極的に導入し、イベントの活性化を図る。

VI. 総括：これからの同窓会が目指す姿と変革姿勢

- **「縮小（守り）」ばかりではなく「活性化（攻め）」へのマインド転換：**
 - コスト削減の議論だけに終始すると、活動自体の活力が失われてしまう。
 - 会員がいきいきと楽しむ姿を周囲に知らせることで、会員維持・増員を図り、会報・会費収入を増やして活動を維持するという「攻め（好循環）」の視点を持つ。
 - お互いがサポートし合って手作りで運営する「安くて良い」イベントを工夫し、開催コストを抑えつつ満足度の高いイベントを提供する。
- **当事者意識の徹底（人せいにしないマインド）：**
 - 現状の課題を他人のせいにせず、全員が当事者意識（「人せいにしない」マインド）を持って変革に取り組む。
- **変革への大きな一歩としての理事会：**
 - これまで不透明だった財務の実態（助成金一覧）が明らかになったことで、本質的な議論ができる「大きな一歩」となった。
 - 財政危機を前向きな「変革のチャンス」と捉え、同窓会に所属するメリットを「お金の支援（物質的なメリット）」から、活動を通じて得られる「楽しさや心の繋がり（精神的なメリット・絆）」へとシフトさせていく。
 - 一方的な情報伝達ではなく、誰もが自由に意見を交わし、共に楽しく孤立を防ぐ「主体的な理事会」を今後も継続していく。